

エゴイストは秘書に恋をする。

1 物語が向かう先とその始まり

「ん、ふっ……」

唇と唇との間から、情欲に濡れた吐息が漏れ出る。

室内灯に煌々と照らされたオフィスの一室で、羽優美は深い口づけに溺れていた。

男は自らの身体で彼女を押さえつけてブラウスのボタンを外し、その手の中に差し込んでくる。

ブラとキャミソール越しに胸を揉みしだかれた羽優美は、首を振ってキスから逃れ、か細い拒絶の声を上げた。

「い……や」

「嫌？？」

酷薄な笑みを浮かべた彼は、低く艶っぽい声で羽優美の耳元に囁く。そしてブラウスから手を引き抜き、羽優美の滑らかなセミロングの髪をかき上げ、耳の裏側を舐め上げた。

熱く、ねっとりとしたその感触に、羽優美はぞくつと身を竦ませる。

彼女の反応に、彼は満足げな声を漏らした。

「君だってその気になってるくせに」

彼の言う通りだ。キスをされ、ほんの少し愛撫されただけだというのに、羽優美の身体には既に火が点き、その先の快楽を求めて疼き始めている。

でも、羽優美にだつて譲れないことはある。

羽優美は力の入らない手で彼の身体を押しながら言った。

「会社では……嫌です」

定時を過ぎ、日はとづくに暮れ、廊下には人の気配など一切ない。が、だからといって会社は淫らな行いをしていい場所ではない。

それにこの部屋は、羽優美の働く場所だ。大きなデスクが二つと、壁の一面を埋めるキャビネットの他は何一つない、無機質で味気ない部屋。それでも、ここで働くことへの誇りだけが、この愛撫に濡れそうな羽優美を支えていた。

この場所を汚したくない。

絶るような思いで訴えたのに、羽優美の首筋に顔を埋めていた彼は冷たく言葉を返す。

「何を今更——ここでするのは初めてじゃあるまいし」

彼の言う通りだ。けれど、ここでは二度としたくない。

「でも常務……会社でこんなことをするなんて嫌です……」

羽優美が懇願の声を絞り出すと、彼は小さくため息をついて顔を上げた。

優雅な弧を描きながらも強さを感じさせるきりりとした眉。切れ長の目。まつすぐな鼻梁。薄い唇。頬から顎にかけては、男らしいすつきりとした輪郭が描かれている。昼間は整髪剤できつちり

整えられている艶やかな黒髪は、今は乱れて一筋二筋、目元に掛かっていた。普段はストイックな感じのする彼だけど、髪が乱れただけで、美しい顔立ちに野性味が加わる。その上、獲物を狙う肉食獣のような目で見つめられて、羽優美は胸の高鳴りを抑えることができない。

一瞬ぼうっと見上げてしまった羽優美に、彼は侮蔑の笑みを向けた。

「君にそんな節度があったなんて、驚きだよ」

彼から突きつけられた言葉が、羽優美の心を抉る。

泣きたい。でも泣いちゃ駄目。

私には、そんな資格はない——

泣くのをこらえていると、彼は大きなため息をついて羽優美から離れた。

「ここが嫌なら、場所を変えよう」

彼はこちらを見もしないで、廊下に続くドアへ向かう。

羽優美は壁に身体を預けたまま、その後ろ姿をぼんやりと見つめた。

ドアを開けると、彼は振り返る。

「どうした？ 来ないのか？」

「来ないなら、それでもいい」と言われているようだ。

羽優美は、バッグとコートを手にして彼の方へ歩いていった。

たつぷりと愛撫された羽優美の裸身が、ぐずぐずに蕩けてモノトーンのベッドに沈む。

彼は、まだ荒い息をついている羽優美の両脚を抱え、愛液でたっぷりと濡れた羽優美の秘所に、避妊具を着けた自身を擦りつけた。

「欲しいって言えよ」

挑発するようなその声に、羽優美はわずかに正気に引き戻される。

羞恥のあまり、返事を躊躇っていると、彼は自身の切っ先で羽優美の膨れ上がった快樂の芽を撈り、入り口にぐいっと押しつける。その弾みでくちゅり、と音を立てて新たな蜜が溢れ出した。指や舌での繊細な愛撫とは違う、荒々しくもどこかしい刺激。羽優美の心臓は、期待に疼いて早鐘を打つ。

しばしの葛藤の後、羽優美は抗い切れずに口を開く。

「欲しい、です」

彼はニヤツと不敵な笑みを浮かべると、自身を一気に羽優美の中へ突き入れた。

「ひあ……っ！」

達する寸前で放置されていた身体は、彼を迎え入れた瞬間に弾け飛ぶ。軽い絶頂に羽優美は脚を突っ張らせ、びくびくと身体を震わせた。

「あっ、やあ！ ま、待ってっ、おねが——ああっ！」

続けざまに何度も突き上げられる。淫らな粘着音が寢室に響き渡る中で、羽優美は喘ぎながら懇願した。

だが、その途端、敏感になつて最奥に彼の硬い先端をぐりっと押しつけられ、羽優美はたまら

ず嬌声を上げる。

そんな羽優美を暗い愉悅のこもった瞳で見つめながら、彼は荒々しい呼吸とともに嘲りの言葉を吐いた。

「待って…… よく言うよっ、腰揺らして……っ」と欲しがってるくせに……っ」

そんなこと、言われなくても分かっている。絶頂を迎えた身体を攻め立てられて苦しいのに、腰が勝手に動いてさらに快樂を貪ろうとしている。

それがたまらなく恥ずかしい。恥ずかし過ぎてどうにかなってしまいたいそうだ。

なのに自分では止められない。その動きも、中の襞の収縮も——

羞恥に染まっているだろう顔を両手で隠して身悶えると、彼はからかうような声を浴びせてくる。

「こんなに淫らになつておいてっ、清纯ぶるなんて今さらだろ……っ」

彼は羽優美にのし掛かりながら、羽優美の両手を掴み、頭の上に押さえつけた。すると、羽優美の中に入り込んでいた彼の角度が変わる。それまでとは違う快樂のポイントを突き上げられ、羽優美は仰け反り甲高い声を上げた。

「ああっ！ やっ、んんっ」

「清纯そうなふりして男を誘惑して、ここにどれだけ男を啜え込んできたんだ？」

「そ——んなことっ、してな——んあ——」

奥の感じるところを硬い切っ先で抉られて、羽優美は否定の言葉もろくに紡げず、あられもない

声を上げる。目の前が白く明滅し、二人が繋がり合った場所から響く水音はさらに激しくなる。不意に、突き放されるように羽優美の身体は解放された。彼の熱く滾ったままの昂りがずるりと抜けていく。羽優美は肉壁を大きく擦るその刺激に身体をぞくぞくと震わせながら、それまで下ろすこともままならなかった両脚を、力なくベッドに落とした。

絶え間なく与え続けられた刺激から解放され、羽優美は懸命に息を吸って失いかけていた酸素を取り戻す。しかし、これはつかの間の休息でしかない。彼女を知っている。

羽優美の呼吸が整わないうちに、彼は彼女の身体を俯せにした。そして腰だけを引き上げると、羽優美の両脚の間に自身の身体を割り込ませる。そして恥じらう羽優美に身じろぎする間も与えず、後ろから勢いよく自身を沈めてきた。

「ひう……っ」

仰向けの時にはなかった苦しさに、悲鳴のような嬌声が漏れる。その苦しさも、二度三度と突き込まれるうちに、多少のキツさを伴った強い快楽へと変わっていった。二人が激しくぶつかり合うことで羽優美の中から溢れた愛液が飛び散り、内股を濡らしていく。

「んっ、あんっ、ふっ……はあ……」

顔が半分ベッドに沈んで、さつきよりも息がしづらい。何とか上体を起こそうと腕に力を込めると、背後で「くっ」という呻き声が上がった。理由は分かっている。羽優美の今の動きで膣に力が入ってしまった、彼自身を締め上げたからだ。

彼の昂りの形をはつきりと感じてしまい、羽優美も息を呑む。すぐに大胆なことをしてしまった

のだと気付き、羞恥に頬を染めた。

「男を悦ばせるのが上手いな」

「言わな……っ、あっ……んやっ、あっ……あふっ……」

彼が笑うとその振動が体内に伝わって、抗議の言葉は喘ぎ声に変わる。

自分が無意識にどんな淫らな反応をしようか不安で、身動きが取れない。じつと快感に耐えていると、彼はそのまま羽優美の上半身を抱き起こし、あぐらをかいた自身の腿の上に座らせた。

「やあ！ ヤメてっ、深い……っ！」

痛くはないけれど、彼自身が際限なく入り込んでくるような錯覚に、恐怖を覚える。羽優美は怯えて彼から逃れようと身を振った。けれど、彼の腿は羽優美の両膝を大きく割り、胸に回された逞しい腕は羽優美の身体を逃がそうとはしない。羽優美は怖がるあまり、彼の腕に指を立てて縛り、少しでも身体を浮かそうとつま先でシーツを必死に掻いた。その動きが、彼をより刺激していると気づきもせずに。

半ばパニックに陥っている羽優美のうなじに顔を埋め、彼は吐息交じりに囁いた。

「大丈夫だ。怖がらなくていい」

嫌がっているのではなく怖がっていると理解してくれた——その言葉と優しい声音に、羽優美は安堵を覚えてふっと身体から力を抜く。そのタイミングに合わせ、彼は下から大きく羽優美を突き上げた。

「あんっ、あ……はあ、んんっ……」

あんなに怖かったのが嘘のようだった。羽優美の身体は奥深くまで突き進んでくる彼を味わい、頭まで貫く強い快楽に痺れる。彼はうなじに吸いつき、両胸を揉みしだいていた指で敏感な蕾をきつく摘まむ。立て続けに与えられる刺激に、羽優美はたちまち我を忘れた。

「ああっ！ はあ、あつ……あつ、ああんっ」

体内で新たな愛液が次々と生まれ、彼の律動によってかき出されていく。二人の繋がりを滑らかにするそれは、もはや彼の太腿全体を濡らし、シーツにまで染み込んでいた。部屋に響きわたるいやらしい水音は、今の羽優美には別の世界で奏でられる音色にしか聞こえない。

誰かに結合部を見せつけるような淫らな体勢は、羽優美を急速に絶頂へと追い立てる。

「常…っ、常、務っ、も、もう……！」

頂点に向けて速度を上げる彼が、余裕のない声を上げた。

「いい加減、名前を呼べよっ」

「文——あ、ああ、ああああ——！」

彼の名を呼びかけた羽優美の声は、歓喜の叫びにすり替わった。

部屋を暖めるエアコンが静かにうなる寝室に、二人が忙しなく息を継ぐ音が響く。

ともに果てた後、羽優美と彼は重なり合ったまま俯せに倒れ込んだ。

彼の熱く汗ばんだ身体が、羽優美の小柄な身体を押しつぶす。息は苦しかったけれど、羽優美は幸せだった。これ以上ない親密な触れ合い。本来であれば彼とこんな風になるはずじゃなかった。

だからこそ、どうしても失いたくないと思ってしまう。

けれど息を落ちつかせた彼は、未練などないとばかりにすぐに羽優美から離れた。ベッドを下り、無造作な手つきで羽優美に上掛けをかけて、寝室から出ていってしまう。かけられる言葉は一つもない。愛の言葉はもちろんのこと、未だ激しい呼吸を繰り返す羽優美へのいたわりの言葉さえも。やがて細く開いたドアの向こうから、シャワーの音が聞こえてくる。

分かり切ってたことじゃない……

羽優美は仰向けになって、涙が溢れそうになる目元に腕を押し当てる。

彼とは結婚してるわけでも、恋人同士でもない。友好的にセックスを楽しむセフレの関係ではない。彼は羽優美を軽蔑して、関係を迫るけれど、羽優美はそれを拒むことも、その軽蔑が誤解からくるものだと打ち明けることもできない。

だって、私は——

言葉にできない想いに胸を詰まらせていると、シャワーの水音が止まった。少しすると、スウェットパンツを穿いた彼が、タオルで頭を拭きながら寝室に戻ってくる。

「シャワーを浴びてこい」

ついさっきまで情熱的に抱き合っていたとは思えない、冷ややかな声。腕をずらして声の方を見れば、彼は整髪剤を洗い流した前髪の奥から、冷ややかな目で羽優美を睨みつけてくる。

「……はい」

羽優美は素直に返事をして、上掛けで胸を隠しながらのろのろと身体を起こした。

事の始まりは、一ヶ月半前にさかのぼる――

十月上旬のある月曜日、始業直後のこと。

「え？ 異動、ですか？」

高梨羽優美は、戸惑って目の前の営業課長に訊き返した。課長は、困ったような笑みを浮かべて答える。

「急なことだからわたしも驚いたんだが。ほら、親会社の社長令嬢の仁瓶綾奈さん、彼女が今日退職することになって、急いで後任が欲しいと言われたんだ。三上常務の専属秘書だよ。突然のことてびっくりしたと思うが、行ってくれるね？」

上司に言われれば行くしかないけれど、羽優美は戸惑いを通り越して混乱していた。

私が秘書……？

寝耳に水とはこのことだ。羽優美は営業アシスタント。秘書課とは何の関わりもない。秘書課には優秀な人材がたくさんいるだろうに、何でその人たちでなく羽優美に専属秘書の話が来たのだろうか？

口元に手を当てる考え込みかけた羽優美に、課長ははつきりとした口調で言う。

「今すぐ来てほしいそうだ。私物を持って秘書課へ行くように」

「え……？」

驚いて顔を上げると、課長はさらに急かしてくる。

「特に必要な引き継ぎはないだろう？」

「は、はい……」

課長が言うように、引き継ぎは必要ない。営業アシスタントは、誰が何を頼まれてもこなせるよう、日頃から業務連絡を徹底しているからだ。

営業課のみんなへの挨拶もそこに、羽優美はデスクの下に置いていたバッグを持って、秘書課のある最上階へと向かった。

営業アシスタントの羽優美は、重役たちとは接点がない。そのため、最上階である七階を訪れるのは初めてだ。

右も左も分からないまま、それぞれの部屋に付けられたプレートの中に『秘書課』の文字を見つけると、唾を呑み込んで、ぐっと覚悟を決める。それから思い切つてドアをノックした。中から「どうぞ」という声があったので、おそるおそるドアを開ける。

秘書課は二十畳くらいの広々としたスペースで、中には同じ方向を向いたデスクが整然と並べられていた。そこで働く女性たちは仕事に集中しているのか、ある人はまるで羽優美に気付いていないかのようにファイルを抱えてきびきびと歩き、またある人は一心不乱にパソコンのキーボードを叩いている。

どうしたらいいんだろう……

営業課長から秘書課に行くよう言われたからには、ここで次の指示を仰ぐしかないのだけれど、誰に訊いたらいいの分からない。それでもそつと一步足を踏み入れてみると、女性の苛立った声が飛んできた。

「あなた誰？ 何の用？」

声の方を見ると、一つだけ他のデスクと対面する形で置かれたデスクがある。そこに、カールしたブラウンの髪をサイドでエレガントにまとめた女性が座っていた。目元がきりつとした美人で、黒のカットソーに、上品なグレーージュのジャケットを着ている。

その女性は傍らに立っていた女性との話を中断して、羽優美を睨むように見つめてきた。怖かったけれど、質問できそうな相手が見つかり羽優美はほつとする。

「え、営業課から来た高梨羽優美です。秘書課に行くように言われて来たんですが……」

「聞いてないわ。誰にそんなこと言われたの？」

叱責にも似た口調で言われ、羽優美は萎縮してしまう。

「か、課長から言われたんです。今日から私、専属秘書になるとのことで内辞をいただいたんですが、詳しいことは秘書課で訊くようにと……」

そういうことだよな？ と心の中でつぶやいたその時、女性がバン！ とデスクを両手で叩いて立ち上がった。

「専属秘書にですって？ 誰の？」

怒りのこもった低い声にびくびくしながら、羽優美は記憶を辿る。

「ええっと、確か三上常務だったと」

思います——と最後まで言わせてもらえなかった。

「何で秘書課に所属したこともないあなたに三上常務の専属秘書の話が行くの？ おかしいじゃない。そんなたわごとを言うために来ないでちょうだい。仕事の邪魔よ。出ていって！」

「え……でも……」

羽優美は仕事をするために来たのだから、すぐごと引き下がることはできない。返す言葉を探して立ちつくしていたけれど、目を吊り上げた女性がつかつかと近寄ってきて、羽優美を乱暴に秘書課の外へと押しやる。

ボタン！ と目の前で勢いよく扉を閉められてしまい、羽優美は途方に暮れた。

今の様子からして、彼女は本当に何も聞いていないのだろう。もう一度ノックして入っていったところで、また追い出されるだけだ。

羽優美はしばし悩んだ末に、営業課に戻ることにした。

——すまん、聞き間違いだった。三上常務のオフィスに来てくれ、だそうだ。『三上文隆』のプレートがかかっている常務室のドアを開けると、すぐ秘書室になっていて、その奥に常務のオフィスがある。

改めて問い合わせてくれた営業課長にそう謝られ、羽優美は再び最上階を訪れていた。

えんじ色の高価たかそうな絨毯じゅうたんが敷かれた廊下をおそるおそる進み、目的のプレートのなかったドアをノックする。だが、待っていても返事がない。そこで羽優美はそっとドアを開けてみた。

そこは縦長の、八畳くらいはありそうな部屋だった。左側にデスクが二つあり、その後ろの壁にはキャビネットが隙間なく並んでいる。正面は一面窓になっていて、右手の壁にはドアが一つあった。他にドアは見当たらないので、「奥」というのはあのドアの向こうのことだろう。

前任の秘書である仁瓶綾奈の姿はない。羽優美は小さく「失礼します」と言って秘書室に入ると、続いて奥のドアをノックした。

今度はすぐに返事があった。

「誰？」

男性の声だ。響きのいい声音で、多分若い人。

「あ、あのっ、え、営業課から来ました高梨羽優美ですっ」

どもりながら返事をする、一拍置いてから声が返ってきた。

「入ってきて」

そっけない返事。拒絶されているような冷たささえある。

「し、失礼します……」

先刻の秘書課でのことを思い出してしまい、羽優美はこわごととドアを開けた。

こちらの部屋は、いかにも重役室といった重厚な内装だった。木目のくっきりとした壁に風景画が飾られ、応接セットも営業課にあるものより一回りも二回りも大きい。

部屋の中にいたのは、男性が一人だけだった。中に入ってドアを閉めた羽優美は、窓辺のデスクに着いてパソコンを操作する男性に改めて目を向けた。その視線に気付いてか、男性がふと顔を上げる。

その瞬間、羽優美は時の流れを忘れた。

社内報に載っていたので、顔は以前から知っている。けれど羽優美は今、一瞬で目を奪われた。年の頃は三十代半ば。整髪剤で整えられた艶やかな黒髪。優雅な弧を描きながらも強さを感じさせる眉。切れ長の目。まっすぐな鼻梁。薄い唇。頬から顎にかけては、男らしいすっきりとした輪郭が描かれている。

社内報の顔写真の人には違いはないけれど、その数倍も美しい男性がそこにいた。

こんなにかっこいい人が存在するなんて、信じられない……

テレビや映画などで俳優やアーティストを見て、かっこいいと思ったことはあっても、今みたいに衝撃を受けたことはなかった。

ぼうっと見つめていると、男性は眉をひそめて冷ややかな声をかけてきた。

「高梨さん？」

「はっはい！」

我に返った羽優美は、慌てるあまりどもってしまふ。男性は厳しい表情をして席を立った。「常務取締役、三上文隆だ。君にはこれから僕の専属秘書を務めてもらう」

その声からは親しみのかけらも感じられず、羽優美はまたも萎縮いじゆくしてしまふ。

「よ、よろしくお願ひします」

羽優美は詰まりながらも挨拶し、遠慮がちに頭を下げる。

顔を上げた時には、三上常務は席に着いて再びパソコンに向かっていた。

えっと……私はどうすればいいの？

数秒待ってみたが、彼は仕事に没頭していて羽優美のことなどすっかり忘れているように見える。

羽優美は思い切つて訊ねた。

「お忙しいところすみません。仁瓶綾奈さんはどちらにいらつしやるのでしょうか？」

彼は顔を上げて、不審げな目を羽優美に向けてきた。

「……仁瓶さんに何の用？」

何でこんな警戒した言い方をするのか分からない。前任者に会いたいと思うのは、おかしいことだろうか？

羽優美は困惑しながらおぼえずと言った。

「仕事の引き継ぎが……それに、秘書ってどんな仕事をするのか分からないんです……」

——教えてくれなかったということは、知っていて当然だと思われていたのかもしれない。

そのことに気付いた羽優美は慌てて謝った。

「秘書はお仕事をサポートするのが仕事なのに、お手を煩わせてすみません！ 基本的なことを教えていただければ、後は自分で何とかしますから！」

羽優美の言葉を聞き終えると、何を思ったのか三上は気まずげに表情を歪めて目を逸らした。

「……基本的には営業アシスタントと同じだ。電話応対と資料の管理。分からないことは必ず訊いて。自己判断はミスにつながるから」

言われて羽優美は、営業アシスタントをしていた時も自己判断禁止が徹底されていたことを思い出す。

仕事のことをまるで知らないのに、自分で何とかする。なんてミスの元だ。自分のさらなる失言に気が動転してしまう。

「すっ、すみません！ そうさせていただけます！」

またもや勢いよく頭を下げる羽優美に、三上は突き放すように言った。

「隣の部屋は好きに使つてくれていいから、まず確認を。——行って」

「は、はこ」

三上の声に追い立てられるようにして、羽優美は隣の部屋に向かう。

ドアを静かに閉めた羽優美は、ほうつと息を吐いた。

なんだか、気難しそうな人だな……

けれど分からないことは訊いていいと言ってくれたし、気まずくても何とかやっていけるはずだ。かかってくる電話の応対をしながら、デスクの引き出しやキャビネットを開けて中を覗く。

キャビネットの中はほとんど空で、残っている資料も古いものばかりだった。デスクの引き出しは筆記用具がやたらと多く、他には変に折れた書類、仁瓶の私物と思われる化粧品や小物がばらば

らと入っているだけだ。

「なんだか、仕事をしてた人のデスクとは思えない……」

仁瓶の私物は後で段ボール箱をもらってきて詰めることにして、まずはくしゃくしゃな書類を全部出して広げた。大事な書類があるかもしれないから、三上に指示を仰がなければならぬ。書類を全て広げ終えると、羽優美は困ってしまった。

「管理する資料って、これのこと……じゃないよね？」

これだけでは資料と言うにはおそまつだが、他に資料らしきものは見当たらない。そのためさつき顔を出したばかりで申し訳なかったけれど、羽優美は思い切って三上のオフィスのドアをノックする。

「返事があつたのでおそるおそる中に入ると、三上に鋭い視線を向けられた。

「何か分からないことも？」

「何だか怒られているみたいで怖い。でも、羽優美は勇気を出して話し始めた。

「お忙しいところ、申し訳ありません。秘書室の確認を終えました」

「もう？」

確認が速すぎて、ちゃんと仕事してないと思われたのだろうか。羽優美は懸命に続ける。

「あの……秘書室にはほとんど物がなかったんです。資料は古いものがほんの少ししかなかったですし、その他はたくさんさんの筆記用具と仁瓶さんの私物だと思われる物があつただけで……。よろしければ、次にすべき仕事のご指示をいただけないでしょうか？ あと、キャビネットがうつすら汚

れているので、掃除道具を借りてきて掃除もしたいです」

緊張しながらまくし立てていた羽優美は、三上がぼかんとしているのに気付いて言葉を切る。一度に言うのはマズかっただろうか。でも、何度も訊きに来るよりは仕事の邪魔にならないと思っただけだ。

「あの……一度にたくさんお訊きしてすみません」

羽優美の謝罪を聞いて我に返つたような顔をした三上は、視線を逸らして後ろ頭を掻いた。そして気を取り直したように立ち上がる。

「いや、こちらこそすまなかつた。管理してほしい資料はこのキャビネットにある。多忙なため未整理になっているので、それを全部整理して、秘書室に保管してもらいたい。ただし五年より前の資料は別にしておいて。秘書室にあつた分もだ。処分するか保存するかは、後で僕が判断する。量が多いから、一日にできると思う分を毎朝持つていって。仁瓶さんの私物はまとめておいてもらえれば後で僕が持つていこう。短時間席を外す分には、いちいち僕の許可はいらない。掃除もそうだ。君の判断でしてくれていい」

そう説明する三上からは、先ほどの怒りは消えていた。そのことにほっとしつつ、羽優美は「分かりました。ご指示ありがとうございます」と言っただけで頭を下げた。

三上のオフィスから資料を運んだり、キャビネットを掃除したりしているうちに、時間はいつの間にか正午を回っていた。

オフィスから出てきた三上は、「これからは、正午になったら一時間の昼休憩を取るように」と告げる。

羽優美はオフィスに引き返そうとした三上に「それでは今から昼休憩に行ってきます」と申し出て、お弁当箱の入った巾着きんちやくを持って秘書室を出た。

三階にある社員食堂は、広々とした明るい室内に、丸テーブルや大きな柱に沿ったカウンター席が設置されたおしゃれな空間だ。メニューも、サラダやスープ、肉や魚のメイン料理が少しずつ載ったワンプレートランチなどおしゃれなものもあって、利用する人は多い。

食堂に入った羽優美が中を見渡していると、丸テーブルの一つに座っていた友人の岸川圭子きかわけいこが、手を上げて手招きしてきた。羽優美も小さく手を上げて、まっすぐその席に向かう。

圭子はショートボブの似合う快活な女性で、営業アシスタント同士という以上に羽優美と仲が良かった。今朝方、羽優美が不安そうに秘書課に向かおうとしていた時も、いつものように一緒にご飯を食べようと言ってくれたのだ。

羽優美はお弁当をテーブルに置きながら、日替わりランチを前にした圭子に声をかける。

「ごめん。遅くなって」

「大丈夫、大丈夫。今から食堂に来るってメールくれたから、自分のランチ買って待ってたよ。はい、これ羽優美の分のお茶」

圭子は自分のトレイに載せていたコップを一つ、羽優美のお弁当の隣に置く。

この社員食堂では持参したお弁当を食べていいし、このメニューを頼まなくてもセルフサービ

スのお茶を無料で飲むことができる。

「ありがとう」

羽優美はお礼を言うと、すぐに席に座ってお弁当を広げた。

「で、新しい仕事はどう？」

箸はしを取りながら早速訊きいてきた圭子に、羽優美は曖昧あいまいな笑みを浮かべた。

「秘書の仕事なんて私に務まるのかなって心配だったけど、営業アシスタントとほとんど変わらな
いみたいだからホッとしてるところ」

「それで、三上常務はどう？ 間近まぢかで見た感想は？」

「え……」

思ってもなかったことを訊かれ、羽優美の頬は赤らむ。

そんな羽優美を見て、圭子にはやにや笑う。

「その顔！ まさか一目惚れ？」

「ううん！ そういうんじゃないから！」

慌あわてて否定したけど、圭子は納得してくれない。

「ウソウソ。顔真まことつ赤だよ？」

圭子が羽優美をからかうと、思わぬ方向から厳しい声が飛んできた。

「あなた方、うるさいわよ！」

「すみません！」

圭子と二人して謝りながら声のした方を見ると、先ほど秘書課で見た三人の女性がちちに近付いてくるどころだった。先頭に立つのは、羽優美を秘書課から追い出した女性だ。いかにも憎々しげに羽優美を睨んでくる。

「特にあなた。三上常務の秘書になったからには、それにふさわしい品位を身につけてもらわなくては困るわ」

「す、すみません……」

肩をすぼめてもう一度謝ると、女性はつんとそっぽを向き、他の二人を引き連れて離れていった。それを見送ると、羽優美はほっとして圭子に向き直る。圭子も肩を竦め、声をひそめて言った。

「食べ終わったら場所移動して話そ」

「うん」

その後は当たり障りのない話をしながら、羽優美はお弁当を、圭子はランチをそそくさと食べた。

休憩室でコーヒーを買うと、二人で営業課近くの給湯室に行った。来客へのお茶出しも営業アシスタントの仕事だから、給湯室はさしずめ営業アシスタントのテリトリーだ。誰でも使っていることになっているけど、休憩室に社員用の給茶機が設置されていることもあって、他の人はほとんど来ることがない。

一畳ほどの狭い給湯室で、シンクにもたれながら圭子が言った。

「さっき睨みつけてきたあの三人組。多分秘書課の人だよ」

「うん……午前中に秘書課で見かけた。さつき私たちに注意してきた人が、すごい剣幕で私を秘書課から追い出したの」

その時のことを話してしゅんとしていると、圭子は肩を竦めて苦笑した。

「それはやっかみだよ。仁瓶さんの後任に指名されたのが羽優美だったから八つ当たりしてるだけ」

それを聞いて、羽優美はさらにしゅんとする。

「でも、秘書課にいたわけでもない私があの人たちを差し置いて専属秘書になれば、いい気がしないのは当然だと思うけど……」

悩む羽優美に、圭子は手をひらひらさせて励ますように言った。

「羽優美が気にすることはないよ。あの人たちが仁瓶さんの後任に選ばれなかったのは、言ってみれば自業自得なんだから」

「え？ どういうこと？」

訳も分からず訊ねると、圭子は廊下に人の気配がないか気にしながら話を始めた。

「ほら、三上常務ってイケメンで独身じゃない？ 社長の息子さんだし、親会社の創業者一族でもあるし」

羽優美たちが勤めている「株式会社三上」は、「仁瓶酒造株式会社」の子会社だ。酒類をはじめとした輸入食品を取り扱う部門が独立して設立された。三上の家は創業者である仁瓶の親類筋にあたり、「仁瓶酒造」と「三上」の経営陣は、三上の家を含めた創業者一族が過半数を占めている。

「しかも三十歳で取締役就任なんて、創業者一族の中でもダントツの若手有望株だしね。だから三上常務が取締役に就任した四年前、彼の専属秘書の座を巡って、秘書課の中で熾烈な争いがあったよ。お互いの仕事の足を引っ張って業務を滞らせたり、陰湿なイジメをしてやめさせたりね。で、人事の目も節穴じゃないから、そんなのに関わってなかった人材から一番優秀な人を選んだらいいよ。で、それがさつき怒鳴りつけてきた秘書課の人。あの人ってば専属秘書になった途端、三上常務の女房取りでね。服装や食事の世話を焼きたがったり、プライベートの予定も知ってたがったり。取引先との接待の最中にも、〃常務とはプライベートでもお付き合いあります〃って言わんばかりに馴れ馴れしい態度を取って、常務はずいぶんばつの悪い思いをさせられたらしいわよ」

あつげにとられて聞いていた羽優美は、圭子の話が途切れたところでふうっと息を吐く。

「よくそれだけの情報を集めたね」

常務の人氣ぶりにもびつくりしたけど、圭子のその手の情報収集能力にも驚かされる。

感心する羽優美に、圭子は苦笑した。

「うん、まあ褒められたことじゃないけど、あたしもゴシップ好きだからね——でね、常務もその人に一応注意したようだけど、服とか食事とかの件はともかく、態度の方はね……『女房気取りはやめてください』って言えば侮辱にもなりかねないし、注意するにも苦労してみたよ。それで通常業務とか取引に支障が出たわけじゃないから余計にね。そんな時に仁瓶綾奈さんがウチの会社に来るって話が持ち上がったの。で、『仁瓶さんを専属秘書にするから君は秘書課に戻って』っ

てことで決着をつけたらしいわ。相手は常務の従妹で、しかも親会社の社長令嬢でしょ？ だから、その人も文句を言えずに秘書課に戻ったらしいわ」

圭子はざまあみると言わんばかりに笑い飛ばす。

そんな圭子に、ちよつと困った笑みを向けながら羽優美は言った。

「でも、何で仁瓶さんの後任が私なんだろう？ 私なんて優秀でもなんでもない、ただの一社員に過ぎないのに」

短大を卒業してから新卒でこの会社に入社し、研修が終わった後に営業課に配属された。この四年間、営業アシスタントの仕事しかしてこなかったのだから、秘書としての経験なんてあるわけがない。真面目だけが取り柄で、圭子ほど仕事をてきぱきこなせるわけでもない。例えば、営業アシスタントの誰でもいいから一人寄越すように”と言われた営業課長が、有能な圭子を手放したくなくて羽優美を出したというなら話は分かるけど。

悩む羽優美に、圭子はあつさりと言う。

「羽優美だけ先週、三上常務が来た時に騒がなかったからじゃない？」

そう、先週末に突然彼が営業課のあるフロアにやってきて、社員一同——特に女性社員が騒然となったのだ。羽優美は仕事で手が離せず見られなかったのだが、それを圭子に言ったら「なんでもつたいない！」とすぐく残念がられてしまった。

「常務の顔を間近で見られるチャンスだったのに、羽優美ってば仕事を優先させるんだもん」

「だって、急ぎの仕事を引き受けてたから……」

すぐ側で仕事を頼んできた人が待つてるというのに、手を止めてひと様の顔を觀賞しに行くのは気が引ける。

もじもじと俯く羽優美に、圭子は呆れたようなため息をついてから、にっと笑った。

「でもま、自分を見てキヤアキヤア騒がない女性社員って、常務にとっては貴重なんじゃない？」
「私、秘書の経験なんて全然ないのに……」

「それはやっぱり羽優美が秘書に向いてると思うたからでしょ。仕事は丁寧だし、機密を扱う秘書業務に就いても絶対会社を裏切らないだろうし」

「そ、そういうことなのかな……」

羽優美はちよつと照れて、紙コップを揺らし底に残ったコーヒーを回す。

多忙な重役に、一般社員一人ひとりを細かく見ている暇があるとは思えないけれど、羽優美の仕事ぶりを認めて指名してくれたのだとしたら嬉しい。

□元が緩んでくるのを抑えられずにいると、圭子がにやにや笑いながら言った。

「やっぱり常務にホレちゃった？」

「だからそういうんじゃないってば。そりゃあかっこいいとは思うけど、付き合いたいとか、ましてや結婚したいなんて全然！」

羽優美は頬を赤らめ、むきになって否定する。

一方圭子にはにやにやしつつ、とぼけたように言った。

「あたし、そこまで言っただけだな」

「圭子っっ！」

その時、廊下の方から咳払いする音が聞こえてきて、羽優美と圭子は慌てて口をつぐんで肩を竦めた。それから小さく笑みを交わし合う。

圭子がスマートフォンで時刻を確かめると、休憩もあと十分で終わるところだった。

「圭子の紙コップちょうだい。休憩室の側を通るから、リサイクルのごみ箱に捨てていくよ」

「ありがとう。——でさ、羽優美。マジな話、秘書課の人たちには気を付けなよ？ やっかみすぎて何かしてこないとも限らないから」

「うん、分かった。ありがとう」

「休憩時間が同じ時は、また昼一緒に食べようね」

圭子は社交的で、一緒に昼ご飯を食べる相手は羽優美の他にもいるのに、心細い思いをしている羽優美を気遣ってそう言ってくれる。

「ありがとう」

圭子の優しさを嬉しく思いながら、手を振り合って別れた。

その日の午後、三上は会議のためにしばらく席を外していた。

帰ってきた時、羽優美は席を立てて遠慮がちに挨拶をした。

「お、お帰りなさい……」

何か考え事をしていたらしい三上は、ぎよつとして羽優美に目を向ける。

「……ああ、君か」

三上の驚きぶりを見て、いけないことをしてしまったのだと思い、羽優美は慌てて謝った。

「す、すみません。営業課では、帰ってきた人たちに『お帰りなさい』と挨拶することになってたんです。常務が目の前を通られるのに挨拶もしないのでは失礼かと思っただんですが……しない方がよければそうします」

挫けそうになって俯くと、三上はうるたえたように言った。

「いや、ずいぶん久しぶりに言われたせいであつと驚いただけだから……これからはそうしてくれ」
なんだか照れくさそうにそっぽを向いた三上を見て、羽優美も妙に気恥ずかしくなり頬を赤らめる。

「あ、あの。お留守の間にお電話が二件ありました。こちらのメモにまとめてあります。それと、仁瓶さんの私物と思われるものをまとめておいたのですが……」

「ああ、もらつていこう」

羽優美から伝言メモと仁瓶の私物を受け取った三上は、何故だか落ちつかない様子でオフィスに入つていった。

* * *

秘書になって最初の週は、電話対応の合間にひたすら資料を整理した。

三上のオフィスのキャビネットはどれも、ファイリングされた古い資料の上に新しい資料が雑多

に積まれて、溢れんばかりになっていった。整理されていない資料の日付は、仁瓶綾奈が専属秘書をしてきた期間と重なる。

何だか、仁瓶さんが仕事してなかつたみたい……

しかも、一向に引き継ぎがない。急な退職であつても、引き継ぎくらいはしていてもよさそうなものなのに。それでもできないほどの何かがあつたのだろうか？

そんな風に疑問はあるけれど、詮索は秘書の仕事ではない。上司の周辺の事情にはあまり踏み込まずにすぎないように、と秘書検定の参考書にも書いてあつた。

秘書の仕事について何も知らない羽優美は、秘書になつたその日の帰り道、駅前の書店に立ち寄つて秘書検定の参考書を買った。秘書について勉強しておけば、少しは仕事の役に立つのではないかと思つたからだ。

内容は秘書業務というより、ビジネスマナーに関することが主だつたけれど、言葉遣いとか、社会人になって五年目だということに知らなかつたことも多くて、とても勉強になっている。

金曜日には、資料の整理はあらかた終わつていた。初めて見る資料も多かつたけれど、分かりやすく分類されていた古いファイルがお手本になつた。……それらのファイルは、あの秘書課の人が作つた可能性が大いにある。大量の資料の扱いに慣れない羽優美にも分かりやすく系統立てて分類してあるところからして、彼女はかなり優秀な人なのだろう。三上が迷惑を被つても左遷したりせず秘書課に戻したのは、会社としても優秀な人材を手放したくなかつたからかもしれない。

その日の午後、頼まれたファイルをオフィスに運んだ羽優美は、三上にこう告げた。

「そのファイルは、一昨年の資料が不足しているのですけど……」

早速ファイルを開いて確認していた三上は、眉をひそめて顔を上げる。

「他の資料に紛れているとか、誤って処分してしまった可能性は？」

ミスを疑われたことに傷つきながらも、羽優美は説明をした。

「私も他のところに紛れていないか何度も確認しているのですが、どうしても見つからなかったんです。それとご指示があったように、お預かりした資料はまだ一枚も処分してないです。……もつと早くに報告しなくて申し訳ありません」

見つからない資料は他にもある。一つのキャビネットを整理することに、分類を始める時と分類し終えた時とで数や内容をチェックしているし、他のキャビネットに紛れ込んでいた資料も見つけて、正しいファイルへと戻す作業も終わっている。それでも見つからないので、もう一度全てチェックしてから三上に報告するつもりだった。

だが、羽優美がそうやってファイリング作業に手間取っている間にも三上は仕事をしていて、資料がいつ必要になるかも分からないことを失念していた。

報告が遅れたことを反省し、羽優美は深く頭を下げる。そこに三上のすまなそうな声が聞こえた。「いや、ちょっと事実確認をしたかっただけなんだ。——するとその資料は僕のデスクにあるか……」

引き出しを開けてしばし中を探っていた三上は、すぐに諦めて顔を上げた。

「秘書課にも同じ資料があるはずだ。借りてきてもらえないか？」

羽優美は一瞬躊躇したけれど、これも大事な仕事だ。

「はい、今すぐ行って参ります」

羽優美は会釈をして三上のオフィスから退室すると、深いため息をついた。

あの秘書課の人とまた顔を合わせなければならぬかと思うと、羽優美は気が重かった。

まともに相手にしてもらえなかったらどうしよう……

怒鳴られるのは怖い、資料を借りてくるだけの仕事もできないのかと三上に失望されるのも辛い。

勇気を振り絞って秘書課のドアをノックし、「どうぞ」と返されてからおそるおそるドアを開ける。

今回は、怖れていたように追いつ返されることはなかった。その代わり、あの女性が自分の席に座ったまま、不機嫌さを隠そうともしないで睨んでくる。

「何の用？」

今日はボルドー色のカシユクールを着て、髪をギブソンタックにしている。いつもブラウスにカーディガンを羽織り、セミロングの髪を頭の後ろでひとまとめにしているだけの羽優美は、服装からして気後れしてしまう。

だからといって、ここで引き返すわけにはいかない。

逃げちゃダメ、逃げちゃダメ……

羽優美は自分に言い聞かせながら中に入ってドアを閉め、勇気を振り絞って言った。

「あのっ、三上常務に頼まれて、資料を借りに来たんですけど……」

「どの資料？」

羽優美が資料名を告げると、女性は無言で立ち上がり、たくさん並んでいるキャビネットの一つから資料を取り出した。

貸してもらえそうな様子なので、半ばホツとしつつ待っていると、女性はドアの前で待っていた羽優美を押しつけて廊下に出る。

「え？ ……え？」

戸惑いながら、閉まってしまったドアと秘書課に残っている人たちを交互に見る。彼女たちはちらちらと羽優美を見たものの、気まずげに目を逸らして何事もなかったかのように仕事を続ける。そのうち、女性が自ら三上に資料を届けようとしているのではと気付いた羽優美は、秘書課の人たちに会釈をすると、慌てて秘書課を出て女性の後を追った。

急いでいるからといって会社の中で走るわけにもいかず、早歩きで懸命に戻る。が、羽優美が秘書室にたどり着いた時には、ファイルを持った彼女は三上のオフィスの中に消えていた。

オフィスの側に寄ると、ドアの向こうから女性の声が聞こえてくる。

「秘書としての経験もない、ましてや秘書課に配属されたこともない彼女を信用できるわけがあり

ません」

その反論の余地もない批判に、ドアノブを回そうとしていた羽優美の手は凍りついた。あの女性が、三上に訴えているようだ。

秘書課の女性の容赦ない指摘はなおも続く。

「信用とは、実績と人間関係を以て培われていくものではありませんか？ 彼女には何の実績もなく、さらには秘書課に所属することもなく三上常務の専属秘書になりました。これではわたしたちと信頼関係を築けるわけありません。ですから、彼女にこの機密資料を預けることはできず、わたくし自らお持ちしたんです」

羽優美は唇を噛みしめながら話に聞き入った。

彼女の言う通りだ。羽優美も彼女の立場だったら、羽優美のような相手に大事な資料を貸すのは躊躇っただろう。

三上も羽優美には電話の応対と資料管理しかさせない。それは、羽優美を信用していないからではないだろうか。

落ち込んだところに、追い打ちをかけるように女性の声が聞こえた。

「借越ながら彼女を一度秘書課にお預けいただけませんか。秘書課でしっかり教育して、一人前になったらお戻しいたしますわ」

自信に溢れたその声に、羽優美は力なく項垂れる。そうしてもらった方がいいのかもしれない。彼女の下で働くのは怖いけど、こんなふうに三上に迷惑をかけてしまうくらいなら。

「もしよろしければ、彼女を教育する間、わたくしが代理をいたしますわ。前回のような失態は二度といたしません。ですから今一度チャンスを」

ずっと黙っていた三上が、彼女の言葉を遮るように口を開いた。

「君は、この僕のこと信用できないと言っているのか？」

「え——？」

呆然としたような彼女の表情が聞こえてくる。羽優美も、三上が何を言っているのか分からず、戸惑いつつもドアノブからそっと手を離した。

三上の厳しい声が響き始める。

「僕が高梨さんに資料を借りてくるよう頼んだのは、彼女を信頼してのことだ。僕だって、その資料が機密情報で、関係者以外の目に触れてはならないものだというのはよく分かっている。しかし、これまでの高梨さんの仕事ぶりを見て、彼女だったらそんな機密情報の取り扱いも任せられると思った。君は、その僕の判断を間違っているとでも言いたいのか？」

「い、いえ……そんなつもりは……」

さっきまで自信に溢れていた彼女の声が、今はかわいそうなくらい弱々しい。三上はさらに続けた。

「君の実務能力の高さは評価している。だが、同じ会社の仲間を信頼し、協力し合うことで、その能力も生かされると覚えておいてもらいたい」

「……申し訳ありませんでした。お言葉、肝に銘じます」

「分かってくれたなら行っている」

「——失礼いたしました」

羽優美が慌てて一歩下がるのと同時に、ドアが開いて女性が出てくる。彼女は羽優美に気付くと、一瞬憎々しげに睨んでから三上の方に向き直り、優雅な一礼をして扉を閉めた。

そして振り返り、後退った羽優美につかつかと近寄ってくる。

「常務に庇ってもらったからって、いい気にならないことね。この無能が」

侮辱の言葉が羽優美の心を抉る。だが羽優美には、その言葉を否定することができない。

羽優美の傷ついた表情を見て少しは溜飲を下げたのか、見下した笑みを浮かべて女性は続けた。

「常務の専属秘書になったからっていい気にならないで。秘書課に在籍したこともない、資格も知識も持たないあなたが、専属秘書として務まるわけがないんだから。そのうち常務もあなたが使えないって気付いて、仁瓶さんの時と同じように持て余すことになるわ」

女性が勝ち誇ったように言い終えた直後、こんこんとドアが叩かれる音がした。はっとして振り返った女性の向こうに、三上の姿が見える。いつの間にかドアが開いていて、彼はそこにもたれかかって腕を組んでいた。

「そうやって他の社員を脅しつけることもやめてもらいたい。態度が改善しないようなら、降格も有り得るのでそのつもりで」

女性はわなわなと震えると、「失礼します」と小さく言って、足早に出て行った。

その後ろ姿を目で追いながら、羽優美は別のことを考える。

常務は、私のことを信頼してるの……？

にわかには信じがたい。でも、本当だったら嬉しくてたまらない。

羽優美はにやけそうになる顔を引き締めて、そろそろと三上に目を向ける。三上はその視線に氣付いて、気まずげに微笑んだ。

「嫌な思いをさせて、悪かったね」

謝ってもらうことなど何もない。羽優美は慌てて首を横に振る。

「いいえ……こちらこそお役に立てなくて申し訳ありません」

資料を借りに行く役目は果たせたと言えば果たせただけで、三上に余計な手間を取らせてしまった。

頭を下げた羽優美に、三上は申し訳なさそうに続ける。

「君は悪くないよ。……問題は、僕の指導力不足だね。さっきの女性は優秀な秘書なんだが、専属秘書に昇格させたら、その……いろいろ問題があつて。指導はしたけど改善が見られなくてね。重大な過失があつたわけじゃないから扱いに困つて、それで仕方なく仁瓶さんを僕の秘書にするからと理由を付けて、彼女を秘書課に戻したんだ」

確かに、『女房面するから異動させる』なんて理由を挙げたら、何を根拠にそう言うのかという話になるだろう。下手をすれば不当待遇だと訴えられかねない。あの女性なら、理詰めでそういう話を持つていきそうだ。雇われる側には雇われる側の苦勞があるけれど、雇う側にも苦勞があるんだなとつくづく思う。

何だか彼が疲れた様子だったので、羽優美は彼を励ますつもりで話しかけた。

「ちよつとだけ噂を聞いてます。常務が取締役に就任した時、常務の専属秘書の座を巡つて熾烈な争いがあつたつて」

でも、狙うのはあの人たちの勝手に、常務は何も悪くないです」と続けたかったのに、彼は弱り顔をして後ろ頭を掻いた。

「そんな噂が流れてるのか……まいったな」

羽優美は自分が余計なことを言ったのに氣付いて、慌てて謝った。

「す、すみません！」

「いや……まあ知ってるなら話してもいいか。——問題なのは彼女だけじゃなくて、この件に関しては秘書課の社員は誰も信用できなくてね。それで秘書課以外の部署から専属秘書を採用させてもらったんだ」

「そうだったんですね……」

圭子の想像は当たりだったというわけだ。足の引つ張り合いやイジメに関わっていなかったはずのあの女性も、専属秘書になった途端、三上のことを狙い出したのだから、秘書課の人間を信用できなくなるのは仕方がないと思う。

しみじみ考えにふけていた羽優美は、はっと氣付いた。三上がこんな話をするのは、羽優美にもあらかじめ釘を刺しておきたいからではないかと。

次の瞬間、羽優美は口走っていた。

「あのっ！ 私は常務のことを狙ったりしませんから！ ……あ」

口にしてしまつてから馬鹿なことを言つたと気付き、しどろもどろに謝罪する。

「へ、変なこと言つてすみません。あの…常務のお仕事を邪魔するようなことは絶対しないと聞いたかつたんです。それはお約束します」

一瞬、目を見開いた三上は、片手で後ろ頭を掻いてからオフィスの中に引き返した。そして羽優美を中に招く。

「…高梨さんが見つけれなかった資料、僕も処分した覚えはないから、この引き出しにあるはずなんだ」

そう言いながら、三上はデスクの引き出しから資料の束を取り出し、どかっどかっどデスクの上に置いていく。

まだこんなにも未整理の資料があつたなんて…！

啞然としてみると、三上が気まずげな顔をして羽優美に微笑んだ。

「もう気付いてると思うけど、仁瓶さんはあまり仕事ができなくてね。僕も忙しさにかまけて仕事を教えてあげられなくて、そうこうしてるうちに收拾がつかなくなつてしまつたんだ」

話をしながら、彼はどンドン書類を積み上げていく。

羽優美が口を開けて見つめているうちに、三上の広いデスクの半分が未整理の書類で埋め尽くされた。

「処分している書類も交じつてるから整理が大変だと思うけど、頼んでもいいかな…？」

きちんとしているように見えた常務に、デスクの引き出しに物を溜め込む癖があつたなんて…

ばつの悪そうな様子から、彼も自分のそういうところはマズいと思つているらしい。

三上の意外な一面を見られて、可笑しさで口元が緩みそうになる。それをこらえて、羽優美は「お任せください」と力強く答えた。

* * *

翌週は月曜日が祝日だったので、会社は火曜日からはまった。その日の昼休憩、羽優美は社員食堂の片隅で一人お弁当を食べる。

この週は、圭子と休憩時間が重ならなかつたからだ。営業アシスタントはお昼時も仕事を頼まれてもいいように、一人は課内に待機しなければならぬ。そのため、休憩は交代で取ることになつていて、今週の圭子の休憩は一時からだつた。秘書になつてからの羽優美の休憩時間は、毎日十二時から一時に固定されている。

この後、どうしようかな…

圭子がいればおしゃべりして過ごすのだが、一人でいると時間を持て余す。

食堂は混み合つているので、いつまでもいるのは気がひける。それに、いつまた秘書課の人たちと会つてしまうかと落ち着いていられないのだ。

先週も四回、ここで彼女たちと行き合つた。社員食堂とは思えないくらい内装もメニューもお

しやれなので、女性社員に人気なのだ。初日以降は叱られることはなかったけれど、視線が合うとすごい目つきで睨にらまれた。だがそれで済んだのは、圭子が一緒だったからかもしれない。先週末のこともあるし、一人でいる今日は何か言われるかもしれない。

そう思っているうちに、秘書課の人たちが食堂に入ってきた。さいわい、羽優美に気付いていないようなので、お弁当を手早く食べて席を立つ。

このまま秘書室に戻った方がよさそうだ。早く戻って先週買った参考書を読み返していれば、時間の有効活用にもなる。

使ったコップを返却口に置き、こそそと食堂を出る。

歩き出してすぐ、羽優美は廊下の端に立って自分を見つめてくる人物に気付いて、ぎくつと足を止めた。

坂本和志まかつし——秘書課の人以外で、羽優美が一番会いたくなかった人。

坂本は、今年四月に中途採用で営業課に入ってきた男性だ。かつこよくて話し上手で、営業課だけでなく、他の課の女性社員の間でもあつという間に注目的になった。でもすぐに、社長令嬢である仁瓶綾奈との仲が噂うわさされるようになった。あの時は、「残念」とか「さすが」といった声があるから聞かれたものだ。

けど坂本本人は、そんな噂が流れて困っているのだと羽優美にこっそり告げてきた。

——向こうから告白してきたんだけど、オレには全然その気がないんだ。でも相手は創業者一族だから、機嫌を損ねたらクビになりかねないだろう？
そんなことでクビにはならないだろうけど、職場に居づらくはなるかもしれない。そうなるのは避けたいという彼の気持ちは分かる。だから羽優美は、彼から相談に乗ってほしいと言われた時、メルアドと電話番号を交換して会社の外で何度か会った。グチを聞いてあげるだけのつもりだったのだ。

けれど坂本は、何かにつけて手をつないできたり肩に腕を回したりしてくる。最初のうちははぐれるといけなとか、人が多いから側に寄った方がいいという言葉を信じて我慢していたけれど、ある時それらが羽優美に触れるための単なる口実だと確信して、思い切って言った。

——困ります。

——そんなこと言わないで。もう気付いているだろ？ オレが本当に好きなのは君なんだ。

坂本を恋愛対象として見たことなどない羽優美は、「ごめんなさい」と謝って、彼を振り切って帰った。

その後プライベートでは会わないと伝えたのに坂本は納得せず、何度もメールを送ってくるようになった。そのうち内容が脅迫めいてきて、悩んだ羽優美は圭子に相談した。そうしたら怒られた。

——このおバカ！ 大して親しくもない異性に相談を持ちかけるなんて、親しくなるためのきっかけ作りに決まってるじゃない！

圭子のアドバイスで、坂本と二人きりで会わないよう気を付け、電話もメールも着信拒否にした。すると別の番号やアドレスから電話やメールをしてくるようになったので、許可した番号やアドレ

スしか受信しない設定にした。

電話とメールという連絡手段がなくなると、坂本は仕事の依頼を口実に羽優美に近付いてきた。それも、庇^{かば}ってくれる圭子がいない時を狙って。

坂本に話す口実を与えないという意味では、今回の異動の話は幸運だった。さすがに常務室までは坂本もやってこられないし、食堂では圭子が一緒だ。実際先週一週間、全く彼の姿を見なかったから諦めてくれたのかもしれないと安心しかけていたのに。

坂本は、今日は圭子の休憩時間が遅いので、羽優美が一人になると踏んだのだろう。

でも、ここは食堂のすぐ近くで、廊下を歩いている人もちらほらいる。坂本は羽優美に言い寄っていることを他人に知られたくないはずなので、何もできないはずだ。

そう思ったのに、坂本は人目を気にせず、むしろ廊下に響くような大きな声で話しかけてきた。

「高梨さん、久しぶり！ 急に異動したからびつくりしたよ」

羽優美はうるたえているうちに坂本に腕を掴まれてしまい、エレベーターのある方へ引つ張られていく。

「頼んでおいた仕事どうなった？ 君が急にいなくなったから困ったんだよ。今から説明してくれる？」

坂本に頼まれていた仕事なんてない。相談を持ちかけたすぐ後から、圭子が坂本の仕事を引き受けてくれていたから。

「あの……！」

ぐいぐい引つ張られながら、羽優美は辺りを見回す。一旦は羽優美たちの様子に興味を引かれて振り返った人たちも、坂本の言葉を信じてか、そのまま歩き去ろうとしている。

助けを求めるべきだろうか。でも腕を引つ張られてるだけで助けを求めるなんておかしい気がするし……

迷っているうちに、坂本は非常階段の手前に設置された防火扉の裏に、羽優美を引つ張り込んだ。そうして腕を壁に突いて羽優美を囲う。

「異動したのにオレに挨拶もなしなんて、ひどいじゃないか」

非難めいた口調に、羽優美は怯えて身を縮こませる。

「きゅ……急に言われたんです。私もびつくりして……」

「それで、オレに挨拶もなしに行っちゃったの？」

打って変わって猫なで声で言われ、羽優美はぞっとする。

怖い。逃げたいのに逃げ出せない。

でも今は壁に追いつめられているだけで、指一本触れられていない。

この中途半端な状況に、羽優美の頭は混乱する。

どうしたらいいの……？

そんな中、圭子に言われたことを思い出し、心の中で何度も練習した言葉を口にした。

「だ……誰かに見られて噂^{うわさ}になってもいいんですか？ 仁瓶さんに知られたら、困るんでしょ

う……？」

圭子の集めた情報では、先にアプローチしたのは実は坂本の方らしい。紳士的だけど少々強引なところもある坂本に、仁瓶綾奈は出会って間もないうちに心奪われ、今では彼女の方が坂本に夢中のだという。

——あいつは仁瓶さんを射止めて逆玉さかたまに乗るつもりなのよ。その上で、羽優美のことは遊び相手として狙ってるの。いい？ あいつ相手に弱気になっちゃダメだからね。ああいう男は、相手が弱気になるところを突くのが常套手段じょうそうしゅけんなんだから。強気になって『仁瓶さんに知られてもいいの？』って言ってやんなさい。浮気がバレて困るのは、あいつの方なんだから——
そうだ。羽優美はやましいことなんて何もしていない。坂本のこと好きでも何でもなく、言い寄られてむしろ困っているのだ。

圭子の言葉から勇気をもらって、羽優美は坂本を睨にらみつける。

しかし羽優美の震えに気付いている坂本は、にやりと笑って顔を近づけてきた。

「オレは仁瓶さんとはそんな気にならないって、何度も言ってるだろ？」

坂本の唇が近づいてくる。

キスされると思った瞬間、羽優美は「いやっ！」と叫びながら坂本を突き飛ばした。

坂本が二歩、三歩と後ろによるけたその隙に、羽優美は一目散に走り出した。

逃げなきゃ、逃げなきゃ、逃げなきゃ……

全速力でエレベーターホールに走り出ると、エレベーターから出てきた人たちが注目してくる。

羽優美はそれに構わず、エレベーターが上に行こうとしているのを確かめて乗り込んだ。

エレベーターが上がっていく最中も、羽優美は操作盤近くの壁際に寄って身を固くしていた。

お願い、早く上へあがって。

羽優美は弁当箱べんとうばこの紐ひもをギュッと握りしめながら、無意識に三上の顔を思い浮かべていた。

坂本さんは、何で私のことを諦めないんだろう……

何度拒否しても、それを無視して迫ってくる彼が怖い。

けれど羽優美は、食堂前の廊下であったことを誰にも相談しなかった。相談できる相手といったら圭子しかないけれど、そうたびたび相談に乗ってもらうのは申し訳ない。異動してしょっちゅう会えなくなったことだし、あまり心配かけないようにしなければと思う。

坂本と会ってからずっと不安ささいなに苛まれていた羽優美は、翌日の水曜日、社外の会合より戻ってきた三上からメモを渡された。

「この料亭に予約取って」

資料管理と電話応対以外にもらった、初めての仕事だ。些細ささいな仕事かもしれないけど任せてもらったのが嬉しい。羽優美は思わず口元をほころばせながら受け取ったメモに目を通す。

書いてあったのは、高級料亭の名前と電話番号、予約日時と人数だった。

羽優美は料亭の名前にうろたえた。営業課でも利用する料亭だけど、特別な取引先への接待にし

が使わないところだ。この料亭を使う時は、営業課長自ら予約の電話を入れていた。

「あのっ、私が電話してもいいんですか？」

奥の部屋に入っついていこうとする三上に慌てて声をかけると、彼は振り返っついていぶかしげに眉をひそめた。

「……どうということ？」

「この料亭って一見さんお断りじゃないですか。私なんか電話をかけたなら、いたずらだと思われちゃうんじゃない？」

必死に説明すると、三上は呆れたようにため息をついた。

「その電話番号はあの店の常連しか知らないし、君は僕の秘書なんだから、これからは君が予約の電話をすることを先方にも覚えてもらわなければ」

そう言いながら羽優美のところへ戻ってきて、デスクに置いてある電話の受話器を取る。そうして羽優美からメモを取り上げて番号をプッシュすると、メモを羽優美に返した。

「——ああ、株式会社三上の三上文隆だが、今後おたくに予約をする際、新しく秘書になった高梨羽優美から電話をさせていただくのでよろしく頼みます。——ええ、今代わります」

受話器を差し出され、羽優美は慌てて受け取る。電話口に出て、羽優美は緊張しながら挨拶した。「はじめまして。株式会社三上、三上文隆常務の秘書の高梨羽優美です」

挨拶を済ませて予約したい日時を伝え、了承されたところでお礼を言って電話を切る。ほっと息をつくくと、目の前にいた三上が微笑まじげに自分を見ているのに気付いた。電話の最中は緊張

しすぎて、彼がいることをすっかり忘れていた。あからさまに安堵しているところを見られ、恥ずかしくて顔を赤らめる。すると、三上は顎にこぶしを当てて笑いをこらえながら言った。

「そういうわけで、これからはこういった予約の電話をかけるのも頼む」

「は、はい……」

羽優美は赤くなつた顔を隠すように頭を下げながら返事をする。

「それと、その接待は仁瓶さんと行くから」

彼の言葉に冷や水を浴びせられたような気分になって、羽優美は呆然と顔を上げた。

予約は任せることができても、接待の同行者には不適切と言われているみたいだ。

「あ……そ、そうですか……」

気落ちが、うっかり口調に出してしまった。羽優美はそんな自分を恥じて、両手をみぞおちの前で組んで俯く。すると三上は言い訳するように言った。

「家族ぐるみの付き合いのある取引先なんだ。先方は仁瓶酒造の社長の娘である仁瓶さんに会いたがっている。仁瓶さんはもうウチの社員じゃないけれど、彼女を連れて行くのはそういう理由なんだ」

妙に慌てた様子の三上を羽優美がきよんととして見つめると、彼はよけいなことを言ったとばかりに気まずげな表情をして羽優美から目を逸らした。

「そういうわけだから、よろしく」

それだけ言っつてそそくさとオフィスに行っつてしまふ。

「はい……」

彼の動揺ぶりにぼかんとしつつ羽優美が答えたのは、オフィスのドアが閉まった後だった。

料亭を予約したのは、その週の金曜日の夜だった。

この日、羽優美が残業をしていると、廊下側のドアがいきなり開いて一人の女性が入ってきた。緩くウェーブのかかったページュ系のミディアムヘア。膝上丈のネイビーボンチワンピースにオレンジ色のジャケットを着た、可愛らしい顔立ちをした女性だった。

予定のない訪問者に動揺しながらも、羽優美は立ち上がってにこやかに挨拶した。

「いらつしやいませ。恐れ入りますが、どういったご用件でしょうか？」

が、女性は羽優美をひと睨みすると、つんとそっぽを向いて三上のオフィスに向かう。羽優美は慌てて引き留めた。

「あのお、お待ちください！ 今常務に」

女性は勢いよく振り向くと、羽優美を睨みつけて怒り出す。

「あなたの案内なんていらないわ！ わたしを誰だと思ってるの？ 仁瓶酒造の社長の娘で、この間まで文隆さんの秘書だったのよ？」

この人が、仁瓶綾奈さん——

羽優美は慌てて頭を下げた。

「し、失礼いたしました」

下を向く羽優美の視界に、かつつと音を立てながら綾奈のハイヒールが入ってくる。

「文隆さんの秘書になったからって、いい気にならないで。あなたが——」

その時、奥のドアが音を立てて開き、三上が「仁瓶さん」と呼んで話を遮った。

「迎えに行くって言ったのに、来たのか」

綾奈はころつと笑顔になって、機嫌のいい声で三上に話しかけた。

「あ、文隆さん。行く前に坂本さんとわたしの結納の話をしたかったの」

綾奈は甘い声でそう言いながら、何故か羽優美に思わせぶりの視線をちらつと向ける。

「分かったから、こっちの部屋に来て」

三上は綾奈の腕を引っ張って、オフィスに引き入れる。ドアを閉める時、羽優美に声をかけた。

「もう仕事に切りをつけて、上がってくれていいよ」

「はい……お先に失礼します」

オフィスから出てくる綾奈ともう一度顔を合わせるのが嫌で、羽優美は手早くデスクを片付け、上着とバッグを持って秘書室を後にする。

エレベーターに乗り込んだところで、羽優美はほっと息をついた。

怖かった……

奥の部屋に入っていく時に、綾奈が羽優美に見せた憎悪の視線。彼女に憎まれる覚えなんてない——坂本のこと以外では。

まさか仁瓶さんは、坂本さんのしていることを知ってるの……？